

う覇気や野性味に欠ける。それがこれまでの武高生の「信用と限界」であったとも云えよう。

それはともあれ、このように、かつて肉の戦場となった日本で失われなかった武高生の文化と自由の伝統の灯が、表面の繁栄の下で実は混乱と頹廢の極みに陥り心の戦場と化している現在の日本においても、校庭に今もそり立つ櫓のように保ち続けられることを私は望む。いや、さらに後輩現役の人たちが奮発して伝統の？ 温室の力を破り、真実に世界へ雄飛する人物を輩出させられんことを、切に願う。

ちなみに、過去、「武蔵の三大理想」の実現度について、非才を省みず私見を述べさせて頂くならば、

「世界に雄飛するに耐える人物」六〇点

「東西文化融合の我が民族理想を遂行し得べき人物」七〇点

「自ら調べ自ら考える力ある人物」八〇点

というところか。諸賢の評定はいかがなものだろうか。

旧制武蔵高校野球部の歴史と山本良吉先生

今井俊満(20期)

画家

武蔵の野球の歴史は終戦直後の昭和20年の九月末にはじま

どがしのばれるから、つぎに引用してみよう。(画集今井俊満一九七五年求龍堂刊より抜粋)。

昭和20年9月10日付――

「あの痛恨極まりなき大詔渙発の数日後一時、時代の経過を見る為、京洛の地へ約10日間程帰省しましたが、関西人のあきらめの早さと復興の早さに一驚を喫しました。関東と関西の長所・短所の相違を見せつけられました。東京では連日宮城、靖国の社頭にひれ伏す人々数知れず、街頭演説、憤慨の余りの喧嘩、宣伝ビラ等、かなりの動揺がありました。それに比し、京都は焼けぬせいもありましうが、防空壕の埋め等の清掃早く、とても町がきれいになり、無料休憩所その他の店開きがあり、京極の人出等、一見戦勝後の平和という感じでした」。「アメリカ兵は現在横須賀、東京、横浜、八王子に進駐していますが、皆温順、明朗、清潔で、且つ将校は紳士的です。皆軽快な服装をして居り、ジープや上陸用舟艇で銀座、有楽町の辺を散歩しています。通行人の約二割が米兵です。不祥事は最近金と時計位で、これも注意して居れば大丈夫です」。「私は9月3日以来登校、学事に勉めています。が、身辺益々多事で、軍諸学校生徒の転入問題、校舎米軍使用問題、慎独寮の焼失復興問題、自炊、その他友人の休学等でなかなか忙しいです。昨日は久しぶりに逗子、葉山の海岸に遊び、今年最後の海水浴をしました。波おだやかで人少なく、大いに浩然の気を養いました。近頃はアメリカの飛行機の編隊が一日中飛ぶので少々うるさいです。今もコルセア

る。高校文科乙類(ドイツ語)一年生であった私が京都の実家に帰省し、父から貰って持ち帰った進駐軍のフリースト・ミットとグローブと硬球で、同級生の正田彬と雨天体操場のバスケット場の前、濯川のほとりでキャッチボールをやっていた。正田とは慎独寮の四年間、同じ釜の飯を喰い、高等科も文乙で七年間一緒であった。

尋常科時代に約一年半薫陶を受けた故山本良吉先生の禁を破って、武蔵で最初に野球をしたのは正田(ピッチャー)と私(キャッチャー)という事になる。ところが運悪く、通りかかった慎独寮の舎監で地理の先生で、武蔵では最も厳格な塚本常雄先生に早速見つかった。ヤバイと思って止めようとしたら、先生がにこやかに笑顔で、「もういいのだよ」とおっしゃって下さった。(戦時中私の一年下級生の加藤亮三が野球道具を慎独寮に持ち込んだら、塚本先生から大変な説教を受け、バットは折られて寮の石炭ストーブにくべられてしまった事がある)。

戦争によってすべてを抑圧され、自由を渴望していた我々にとって、野球の解禁は正に晴天の霹靂で、敗戦の鬱憤を吹き飛ばし、喝采を叫びたい気持ちであった。そしてすぐに同じ文乙の正田や石塚陽式らを誘って、野球部の創設にとりかかった。十月には山川校長によって正式に校則として野球が許可された。

この頃私が大阪船場幼稚園時代の恩師氷見静子先生に、書き送った手紙がのこっている。終戦直後の心境、社会風俗な

が数機、我が物顔に悠々と飛んでいます」

高等科は戦争のため短縮され、二年生が最高学年で、二年生は皆東大受験準備で部活動から遠ざかっていた。その後しばらくして旧制高校は再び三年制に復活する。

野球部の道具、グローブの大半は私が父から進駐軍用のを寄贈させた。ミットは戦前甲子園に出場した平安中学の名捕手が使用した中古品で、あとは神田の美津濃に行つてバットや硬球、スパイク等を補充。ユニホームは各自ばらばらで、胸に縦書きで「武高」と書いた布を縫いつけた。勿論背番号はなく、ユニホームの下は越中褌一枚であった。また日本手拭を腰にぶら下げる者もいた。

武蔵の校庭、運動場は終戦のころは現在の中・高校の校舎や集会場もなく、生徒数が五百人にもみたなかったし、広々とし、メインのトラックのある運動場はサッカー部と陸上部が主に使用し、二つのゴールが常設されていた。そして野球場はこのサッカー場に、昭和21年春休みの間に、私の父から三千円を出して貰って、工事屋に頼んでわれわれが全くの許可なしに勝手に作りあげてしまった。これが春休みあけになつて、サッカー部との大口論に発展する。結局サッカー部の松尾君(19期)、石渡(20期)たちとの話し合いで、交互に練習する事で和解が成立した。

最初のチームは投手堀切、正田、捕手今井、一塁薩埵、二塁石塚、遊撃高橋、三塁梶原、外野に加藤、米倉、津田、それにバスケット部とかけもちで長沢も加わった。

そして部の活動費を貰うため、部長に矢島剛一先生になっていただき、正式に野球部は発足、部室も本校舎(今の大学)の二階の左側の一室をいただいた。初代キャプテンには梶原信夫がなった。昭和21年の夏休みには梶原のはからいで愛日寮で合宿も行われた。

その後部員として小倉、重政、平野、広瀬、服部、草間、宇佐美、林らも加わった。

最初の対校試合は成蹊高校に遠征したが、大差で敗退。つづいてはじめて武蔵の校庭で野球場開きに行われた東京高校戦にも大敗した。しかし第三戦の武蔵校庭での水戸高校戦には見事14-7で初勝利をあげ、私もライト・オーバーの二塁打を放って勝利に一部貢献した。私は六番を打ち、あまりヒットも出なかったが、三振も学習院戦での一回だけ、総合打率は2割6分であった。キャッチャーだったので選球眼はあったのである。私の水見先生宛の昭和21年10月1日付の手紙を引用してみよう。「東京は相変わらずスト等の紛争が絶えませんが、全体としては落ちつき、じょじょに昔に帰りつつあります。学校ではインター・ハイが行われる等、空虚な戦後の状態から立上ろうとする意欲が不十分乍らも昂りつつあります」

私の部活時代は、浦和、学習院、二度目の東京高校戦にも敗れ、唯一の勝利は水戸高だけであった。

旧制高校野球は蜜カラで敢闘精神にみちたものであり、私も試合中ファウルチップで突き指、指が外れてぶら下ったが

化した愛日寮の環境から逃れるべく、野球に熱中したという。私自身も画家として、自由(アナキー)、マイノリティ、ダンディに生きたいとは思っているが、右も左も全体主義には興味はない。

私は武蔵入学以来、山本良吉先生の死に至る約一年半の間、先生から修身の講義をはじめとして、様々な薫陶を受けた。

先生の教育方針は英国のイートン校に範をとった少数精鋭主義のジェントルマン教育であった。同時に古い日本の伝統にも眼を向けさせ、宝生流の謡曲や、尋常科一年の時には墨東の三囲神社、長命寺、百花園に遠足させられた。また中国文化も尊重され、入学後すぐに十八史略を学んだ。私が画家として多少国際的に活躍出来るようになったのも、山本先生の教育と武蔵の三大理想に負うところ大だと考えている。勿論伝統は「引き継ぎ」と同時「裏切り」という行為によって連続していくものだが。

哲学者西田幾多郎、宗教家鈴木大拙、教育者山本良吉は三人の親友であり、それぞれの意味で日本の第一人者であった。武蔵に講演に来られた鈴木大拙師が腕をこまねき、天を仰いでとつとつと着物姿で話された風貌に、私は深い感銘を受け、未だに私の脳裏に焼きついている。戦後世界の思想界、そして特に芸術の分野(ジョン・ケージやアクション・ペインティング、アンフォルメル)に於ける影響は計り知れないし、戦後のアート、現代音楽は鈴木大拙からはじまったといっても過言ではない。

自分で差し込んで試合を続行、今でも右手のくすり指は斜めに曲っていて絵を描くのに多少の支障を感じている。また突き指で療治(りょうぢ)になつてはれ上り、堀切に返球する球が血だらけになった事もあった。こうした頑張り(がん張り)と精神性は私にとって後年の長い海外生活に大変役に立ったと思っている。

21年の秋にはリーグ戦を終えた東大野球部の面々が武蔵校庭に現われ、練習を指導する事になる。その年の東大は歴代の最強チームで、山崎論、岩佐、堀越、立松らの名選手たちが直接指導してくれたのである。

その頃はキャッチャーを小倉にゆずり、絵を描きはじめで数ヶ月間退部した。戸塚も病気で退部、正田はさきに堀切が正投手となった時点でデニス部に移っていた。堀切と正田は東京高師附属小学校で共にバッテリーを組んでいたのである。

私の卒業後、翌年武蔵の野球部は関東旧制高校トナメント2位という黄金時代を迎える。

私たちが野球をやりはじめたのは故山本良吉先生の決めた校則に反抗したためではない。ただ野球がやりたかったからである。戦争によって抑圧されていたものが、それによって一挙に解放されるように思えたからである。スポーツ熱は食糧難とは全く関係なしに日本中に浸透していった。それはフジヤマの飛び魚古橋の活躍によっても象徴されるだろう。一方武蔵の生徒も戦後急速に左翼化するものも多く、先述の塚本先生つるし上げ事件にまで発展しようとする。梶原は左翼

山本先生は暴力を徹底的に否定され、暴力を振った生徒は退校という事になっていた。

だから武蔵では現在でも多くの学校でみられる様な上級生、下級生の差別やしごき、いじめは全く無く、わが野球部でも全員平等で、球拾いや用具の整備も各自の分担で、上下のへだてなく和気あいあいであった。

山本先生が野球を嫌い、対校試合を好まなかった事も、ある面では私はうなずける。

アメリカにはプロ野球やプロスポーツが戦前、早い時期に生まれていたし、アメリカに常にと追いついた日本にも昭和9年には職業野球チームが誕生した。山本先生が憂慮され、危惧された弊害は最近になって現れはじめている。金のかかりすぎるプロ化されたオリンピック、ただ勝つためのドーピング、ショービジネスによる死者を出すほど異常なまでのサッカーファンの暴動、トトカルチョや賭博、余りの高額な選手の給料によるアメリカプロ野球リーグのストライキ、日本での異常なまでのスポーツ紙の売れ行きとテレビ等のマスメディアによるプロ選手の英雄化と万能の傾向、これらは本来のスポーツ精神、オリンピック精神に反するものだろう。例えばサッカーに於ける対韓国戦に見られる様な、スポーツの枠を越えた国と国との怨念試合、正にスポーツは病んでいるのだ。そしてフランスの学者コジェーヴのいう様に、日本人は平和ボケによる「アメリカン・アニマル」になり下ってしまったのではないだろうか。あるいはニーチェのいう無

気力な「末人」になり下ろうとしている。

私は30年近く外国に住んだが、日本のマスコミは西欧のマスコミ、例えば「ル・モンド」紙の十分の一も世界で起っている出来事、殊に後進国や発展途上国の出来事を報道しない。日本の四大紙やテレビもアメリカ中心の報道であり、その殆んどがプロスポーツに多くの紙面をさいている。私の30年に及ぶ海外生活の中で、西欧の文化人や知識人との間で、日本の様にプロスポーツが話題になる事は殆んどなかった。だからといって彼等がスポーツをしないわけではない。ここにも山本先生の教訓が生きているように、私には思えるのである。山本先生に関する記述は今井個人の見解であって、他の野球部諸君の見解ではない。個人個人いろいろな見方があってもよいと考えている。